

田中 厚子：2002年度「藻類談話会」に参加して

2002年度「藻類談話会」が11月9日（土）午後、京都大学農学部にて開催されました。今年で復活後8回目にあたる「藻類談話会」は、藻類を研究材料としている各界の研究者が、それぞれの分野を超えて交流することを目的として、毎年関西地区を中心に行われています。今回も様々な分野の方のご講演に対して、活発な意見交換が行われました。講演会には39名、懇親会には23名の方が参加されました。

発表者（敬称略）と講演題目は以下の通りでした。

坂東忠司（京都教育大・教育学部）：ホウネンエビと共に生きる藻類

大城 香（福井県立大・生物資源学部）：ラン藻の窒素固定
左子彦彦（京都大院・農学部）：有毒鞭毛藻の遺伝子診断法の開発

伊藤裕之（神戸市水道局・水質試験所）：浄水処理障害の原因となる藻類について

吉田吾郎（水産総合研究センター）：広島湾におけるホンダワラ類の生態研究と藻場造成

最初の坂東先生のご講演は、ホウネンエビという田んぼに生息する甲殻類の遊泳脚に付着する淡水産緑藻 *Characium* についてのお話でした。ホウネンエビの体表に付着している *Characium* は、ホウネンエビが頻りに脱皮をくり返す度に、遊走細胞を作り、脱皮後の新しい体表にも付着しているのではないかということでした。またホウネンエビが走光性を持ちいつでも背泳ぎをしているのは、遊泳脚に *Characium* を付着させるためなのではないか、などホウネンエビと *Characium* の関係についてお話していただきました。現在の時点では共生関係があるという確証は得られていないようですが、エビにとっては酸素供給、*Characium* にとっては分布拡大、というような利点をもつ共生関係の存在が十分に考えられるらしいので今後の研究がとても楽しみに思えました。

大城先生のご講演は、ラン藻の窒素固定と光合成の関係についてのお話でした。窒素固定は酸素によって阻害されるため、窒素固定を行うラン藻では明期に光合成、暗期に窒素固定という使い分けが行われていて、そのようなラン藻では光合成や窒素固定にサーカディアンリズムがみられるということでした。しかし私にとって何より不思議だったのは、光合成と窒素固定を同時に行うラン藻がいるということです。詳しいことはまだ分かっていないようでしたが、私達がまだ気付いていない効率の良い方法があるのだろうと思い、とても興味深く感じました。

左子先生のご講演は、遺伝子を用いて有毒渦鞭毛藻の種類を判別しようというお話でした。形態的な形質の判別が困難な渦鞭毛藻を、遺伝子解析を用いてより簡単に種類を同定し

ようという試みで、分類学を学ぶ私には少し抵抗もありましたが、有毒な渦鞭毛藻をより素早く判別するという点では、遺伝子による迅速な種の同定は有効なのだろうと感じました。同じような手法でも視点が違うとその使い方や読みとる情報が全く違うのだということを実感したお話で、とても良い勉強になりました。

伊藤先生のご講演は、浄水処理を行う上で障害となる藻類と、その対応策についてのお話でした。例えば、貯水池の入水口を水位別にいくつか作り、藻類が発生した時は底の方から水を採る、などのいくつかの対応策について具体的に分かりやすく説明して頂きました。また全国の水道局にアンケートを実施したところ、藻類に対する認識はほとんどなかったため、各種の藻類と浄水処理障害の関係をより詳しく把握するために障害となる主な藻類の検索システムを作成し、全国的な対策を促す活動に取り組んでいるというお話もありました。藻類が水道水に混ざると生臭いにおいがするそうですが、伊藤先生は藻類が臭みとして感知される最低濃度なども把握されていて、神戸市の水を飲んでいる私としてはとても頼もしく感じました。

最後の吉田先生のご講演は、広島湾内のホンダワラ類の生態学的研究とその結果をどのように藻場造成に応用するかという、今回のご講演の中では唯一の大形藻に関するお話でした。同じアカモクでも広島湾の入り口付近と湾奥部分の個体群では成熟時期が大きくずれるというお話や、一年生のホンダワラ類が生えてくるのか、多年生のホンダワラ類が生えてくるのかは底質によって決まるというお話など、大型藻と環境との関わりについて様々な研究結果をお話していただきました。私は大型藻を研究対象としているので、非常に興味深く色々なことを考えさせられるお話でした。

今回の講演会で私が一番強く感じたことは、異なる分野のお話でも、自分の研究のヒントになるということでした。日頃はやはり自分の研究に関係することばかりに目が行きがちですが、専門外だと思っていたお話もふと気がつく自分の研究にも生かせる事があると思います。そのような機会を与えてくれるという意味でも、このような講演会に参加するのは有意義であると感じました。

今年の談話会は例年に比べて参加者がやや少なかったことがとても残念でした。藻類を対象とした様々な分野の研究に触れられるという数少ない機会であり、多くの参加者の方によってより活発な交流が行われていくことで、藻類という分野全体の活性化にもつながるのではないかと思います。来年は私の通う神戸大学での開催が決定しておりますので、より多くの方が参加して下さるのを楽しみにお待ちしております。

（神戸大学・自然科学研究科・生命科学）